

# シンガポールのネーション意識と多民族主義

## —民族的差異と相互行為に着目して—

### ‘Multiracialism’ and Nation Consciousness of the Singaporeans: Focusing on the Concept of “Racial Difference” and their Interaction

齋 藤 真由子

Mayuko SAITO

(日本女子大学 非常勤講師)

#### 要 約

近年、シンガポールでは「シンガポール人」という意識が明白になってきたことを象徴するような運動が起きている。しかし、シンガポールは言語や宗教、文化が多様な多民族社会であり、それゆえ、共有可能な基盤が欠如した国である。そのような社会において如何にしてネーション意識がうまれたのか。本稿ではシンガポールの多民族主義という政策を通してシンガポールの人々の民族的差異と日常生活であまれる相互行為に着目し、その観点からシンガポール人のネーション意識のあり方について検討する。

#### [Abstract]

---

Singapore is well-known as a ‘multi-racial’ society, but then, how they form their identity as ‘Singaporean’? Considering this problem, multiracialism becomes an important concept in making ‘Singaporeans’. However, its purpose is to make ‘racial’ differences obvious and emphasized. Therefore, how do people create such consciousness in these kind of society? The aim of this paper is to study this problem by using free talking interview and observation data carried out by the author. We can say that the government of Singapore reinforces the ‘races’ in order to make differences among ‘races’ highly visible by emphasizing the differences among the ‘races’. In this kind of a society differences among ‘races’ are visible even though people from different ‘races’ interact with each other daily. Moreover, a sense of community or even of being a ‘Singaporean’ begins to grow and maintains; at the same time, differences among ‘races’ are maintained.

---

#### 0. はじめに

「8月21日にカレーを作ろう」という運動を呼びかけるコミュニティが2011年facebookに登場した。この運動はインド系シンガポール人家族と中国人家族との間の近隣トラブルを発端としている。シンガポールの英字紙ストレーツタイムズ(the Straits Times, 以下STと略す)によると移住してきたばかりの中国人家族が隣に住むインド系家族の作るカレーの匂いに我慢が出来ず、政府組織である住民調停センター(Community Mediation Centre, 以下CMCと略す)に仲裁を申し出た。CMCのスタッフは双方の言い分を聞き、インド系家族にはカレーをつくることを中国人家族の不在時にするように、また中国移民にはカレーの匂いになれるよう言い、当事者の間では解決した(ST 2011/08/18)。しかし、この判断にfacebook上で「民族差別的だ」「シン

ガポール人を激怒させた」「CMCのスタッフは中国人家族がシンガポールの生活様式に適應するよう言うべきだ」と批判が多く寄せられ、その結果「8月21日にカレーを作ろう」という運動が誕生した。2011年8月18日の段階で5万人以上の人々が参加を表明し、そのなかには華人系やマレー系も少なくない。この騒動にシンガポールの法相シャンムガムは16日に会見を開き、「シンガポール人のアイデンティティが発展していること、そしてシンガポール人たちがそれを前進させる用意があることには元気づけられた」としつつも、「しかし、それが外国人排斥や外国人への攻撃につながるようなことはあってはならない」と外国人排斥にもつながる動きへ警鐘を鳴らした(ST 2011/08/18)。

この一連の騒動の背景には、シンガポールと中国とのこれまでの関係による不満がないとはいえない。しかし、カレーの匂いというシンガポール人を構成する一つの民族(race)を象徴するものを否定したことに対する怒りを率直に表す出来事であったことは否定できないだろう。このことは、シンガポールの人々の中で「シンガポール人」という意識が形成された結果といえるだろう。では、それはどのようにして創られ、維持されているのだろうか。後で詳述するように、シンガポールを構成する人々は文化、宗教、言語が多様であるがゆえに共有可能な基盤が欠如し、さらに国内での独立の意思が明確ではないうちにマレーシアから分離独立されたため、シンガポール人の形成はこれまでのナショナリズム論ではとらえることが難しい面がある。さらに、シンガポールは政府の管理が強い強権社会で有名である。そのため、これまでシンガポールの国家建設を考えるうえでは政策的な論点から語られることが多かった。しかし、このような運動が起きているということは、政策とは異なる方法でシンガポール人の中で「シンガポール人」という意識が確立されていると考えることができる。では、いかにしてシンガポールの人々は「シンガポール人」という意識を再生産しているのだろうか。

「シンガポール人のためのシンガポール」を創るため、シンガポールでは多民族主義を国是としている政策である。結論を先取りすることになるが、この政策は4つの民族の差異を明白にし強化するものである。「言語、文化、宗教の違いは往々にして人種・民族・エスニック集団間の経済的、政治的格差という」(関根 2000:42)が、シンガポールにおいては、それをネイションをうみだすための要因となっているのだ。

本稿では以上のことを検討する。そのために本稿は1節においてシンガポールの概況をみて、続く2節でシンガポールの多民族主義の政策的側面と同政策に関する先行研究を概観する。3節では、筆者が遂行したインタビュー調査と参与観察のデータをもとに日常生活レベルから多民族間の差異と民族間の相互行為のあり方を検討し、そのような観点から再生産する「シンガポール人」を考察する。

## 1. シンガポールの現況

東京23区と同程度の面積を持つシンガポールは現在、総人口<sup>1</sup>531万人(シンガポール市民328万人、永住権所持者53万人、1年以上の滞在者150万人)<sup>2</sup>の人々が暮らしている。その民族構成は華人系が74.2%、マレー系13.3%、インド系9.2%、その他3.3%<sup>3</sup>となっている。信仰宗教は多岐にわたり、信仰の自由と平等が憲法で規定されている。シンガポールを構成する主として4つの民族は、文化的、宗教的にも全く別の系統に属しているためネイションとして一体感

をもたらすための核となる共通の基盤が欠如していることが特徴である。

シンガポールが多民族社会となった背景としては、1819年トーマス・スタンフォード・ラッフルズが上陸したことをきっかけに始まる。イギリス植民地時代に労働力として大量の移民が中国南部やインド南部からシンガポールに移住させられた。このさい、居住地区を民族別に棲み分けることで、移民してきた人に「民族(race)」という概念を定着させた。「『エスニック』集団という語句を用いるべきであるが、シンガポールではraceという言葉が政治的な場においても使用されており、シンガポール人にとっても公用語(common parlance)となっている」(Chua 2009: 239)とあるように、現在においてもエスニック・グループではなくraceがシンガポールでは使用されている。以上の事情を考えると、本来であればraceは人種と訳すべきであるが、本稿では民族と訳すこととする<sup>4</sup>。

また、シンガポールが独立する過程をみると、多くの新興国にあるような内部からの独立への意思が際だっていないこともシンガポール人の自己理解を検討するうえで重要なことである。1942年2月から1945年8月の3年半におよぶ日本軍政下後、現地の人はシンガポールとしての独立ではなく、マラヤ連合への統合による独立を目指すことになる<sup>5</sup>。1959年にシンガポールはイギリスから自治権を取得し、1963年にマレーシア連邦の一州として独立する。しかし、「マレー人のためのマレーシア」建設を目指しマレー人を優遇する政策を推し進めるマレーシア連邦政府に対し、「マレーシア人のためのマレーシア」建設を目標として掲げ、民族間の平等を主張するシンガポール州政府(当時)の意見の食い違いが結果的に2度の民族間暴動を引き起こし、多数の死傷者を出すことになる。

このことがきっかけとなり、1965年シンガポールはマレーシア連邦から独立を余儀なくされた。独立後のシンガポールは、「マレーシア人のためのマレーシア」ではなく「シンガポール人のためのシンガポール」建設を目指すようになる。つまり、特定の民族を優遇するのではなく、民族間の公正、平等を基盤とするようになった。この思想が最も反映されている政策が多民族主義(multiracialism)だ。

## 2. シンガポール多民族主義とは何か

多民族主義とは「シンガポール人のためのシンガポール」をつくるための理念といえる。では、具体的にどのような政策によって「シンガポール人」をつくろうとしたのだろうか。本節では、まず、多民族主義を言語政策と文化政策、住宅政策の3つの政策から検討してみる。というのも、この3つの政策に多民族主義政策の意図が顕著にあらわれるからだ。その後これら政策を扱った先行研究を概観する。

### (1) 多民族主義政策

#### 1) 言語政策

独立当初、シンガポールの言語状況は福建語を話す人が30%と最も多く、他方現在公用語とされる英語18%、華語0.1%、マレー語11.5%、タミル語が5.2%であった。しかし、現在家庭内で使用する言語の割合では、英語32.3%、華語35.6%、マレー語12.2%、タミル語が3.3%となっており、福建語が7%となっている<sup>6</sup>。このような中国語方言の減少と英語と華語の増加の背景には政府による政策がある。

国土も狭く豊富な資源もないため、政府は外資による経済的発展を目指し、英語重視の政策をとるようになる。まず、行政及び教育用語として英語を位置づける。独立当初、言語別に学校教育機関が設けられていたのだが、政府が英語を重視したため、華語校、マレー語校、タミル語校への入学希望者が減少した。1980年代になると特にタミル語校やマレー語校への入学者が途絶え、多民族が英語校に通うようになった(田村:2000)<sup>7</sup>。

他方、英語のみを重視しては民族のアイデンティティが喪失されてしまう、とし「母語(mother tongue)」の習得も求めた。政府は「母語」として華人系には華語、マレー系にはマレー語、インド系にはタミル語を割り当て、学校教育機関では「母語」科目を設置し、学生に対して学校教育において「母語」の習得を義務付けた。興味深いことに、華語は独立当初の華人系で最も使用されていた言語ではない。福建語や潮州語が多いなか華語を「母語」と強要し、さらに華語以外の中国語諸方言の使用を抑制するために1978年にスピーク・マンダリン・キャンペーンというキャンペーンを行った(田村2000:245-248)。

以上のような言語政策により、一方では英語という共用言語を習得することで民族間のコミュニケーションを円滑にし、他方で「母語」の習得も義務化することで民族内の言語的多様性が抑制される。一つの民族集団内の多様性を抑えることで、他の民族との差異が一層強調される。そうすることで、民族間の差異を強化したのである。

## 2)文化政策

民族集団内の同一化は言語政策のみではなく、文化政策によっても進められていると考えられる。1993年国家遺産局(National Heritage Board 以下 NHB と略す)が設立された。これはシンガポールが独立以来「文化の砂漠(Cultural Desert)」と呼ばれてきたが、その汚名を払拭するための一つの政策である<sup>8</sup>。NHB が開設以来、力を入れて推し進めてきたものの一つが各民族のエスニック・ミュージアムとしてのヘリテージセンター(Heritage Centre 以下 HC と略す)の設立である。これは「(各民族集団の)文化遺産・文化・歴史を展示することでエスニック・アイデンティティや価値観の保持を可能にすること」を目的としている(奥村 2009:202)。HC は各民族集団が基金を集めて自主的に委員会を立ち上げ、センターを建設することになっている。HC を建設し、自らが属する民族の文化遺産や文化、歴史を展示するという目的のもとにうまれる団結力を形成してほしいという意図があるのだろう。

また、HC をつくることで、自らが属する民族の歴史や文化の「モデル」ができる。このモデルの誕生により、民族内部の多様性が薄れていく。HC の設立には民族アイデンティティの形成と強化、そして民族の歴史や文化遺産の理解などの画一化が進むことが予測される。というのも、民族内部の画一化が進むことで異なる民族との差異を強調することが可能となるのである。

## 3)団地政策

言語政策と文化政策は民族集団内の同一化、画一化を進め、そうすることで民族間の差異を強調する政策であるといえる。しかし、団地政策はこれら政策とは異なることを目的としている。多くの移民国同様、シンガポールにおいてもイギリス植民地時代以来、民族毎に村を設け人びとは自らが属する民族の村に居住していた。しかし、独立後、その村を取り壊し、その跡地に住宅開発庁(Housing and Development Board)が公共団地を建設し、政府は市民に団地への居住を促した(鍋倉 2011:51)。現在人口の82%がこの団地に居住しているが、独立以前のように特定の民族

によって集住することはできない。各団地棟にはクォータ制が導入されており、民族別入居の上限が定められている(鍋倉 2011:10)。民族別に居住割合を決めることで特定の民族による集住が避けられ、居住地における民族混合を強要されているのだ。

一見、これは矛盾であると感じるだろう。エスニック・タウンのようなものをつくりそこに特定の民族が集住するほうが民族間の差異は強調されるように思える。しかし、それでは隣近所が同じ民族に属する人となり、生活実感として民族間の差異が喪失してしまう。シンガポールでは、クォータ制によって民族別に入居割合を定めることで、生活実感においても多民族の存在を認識可能にしているのだ。

多民族主義政策は「シンガポール人のためのシンガポール」をつくることを目的としながら、さらに団地政策においてみたように多民族を混住させ、そのうえで言語政策においてみたように民族間の差異を強化し強調するような政策をとりつづけてきたということが特徴である。

## (2)シンガポールにおける多民族主義

多民族主義に関する研究の古典としては、ジョフリー・ベンジャミンによるものがあげられる。ベンジャミンは多民族主義を「複合社会の住民を構成すると見なされる様々な『民族』の文化及びエスニック・アイデンティティに対して平等な地位を与えるイデオロギー」(Benjamin 1997:67)と定義し、さらに「住民が『民族』という一つの特定の配列で分割されているように定義、限定する働きをする」(Benjamin 1997:67)と述べた。これにより「(多民族主義の下,)華人はより華人に、マレー人はよりマレー人に、インド人はよりインド人になるような圧力の下に置かれる」(Benjamin 1997:75)。政府により市民のアイデンティティや文化が民族によって規定され、さらに多元性を強調する多民族主義政策が言語政策や住宅政策などにより幅広く行われ、民族は強化されていると述べる。ベンジャミンの研究はその後の多民族主義研究の基盤となったが、具体的に多民族主義がどのようにシンガポール社会において影響しているのか記述していない<sup>9</sup>。

では、ベンジャミンの多民族主義政策が実際のシンガポール社会にどのように作用しているのだろうか。本稿ではシンガポール人の生活空間を観察し、さらにインタビューのデータから検討していく。

## (3)現地調査に基づいた多民族主義研究

数少ない現地調査に基づく先行研究として鍋倉(2011)の研究がある。鍋倉は、多人種主義という言葉を用いて、政府側からのエスニシティに対する積極的な働きかけという点で多文化主義と多民族主義は共通するとし、シンガポールの多人種主義を多文化主義のなかの企業的な多文化主義<sup>10</sup>に位置づける。そして、多人種主義の現場を参与観察することで、批判的多文化主義による「多様性の管理」という批判を退けるよう試みた。まず鍋倉は多人種主義を政策レベルと団地生活レベルの二つの視点から検討し、双方が平行な関係であることを導く。政策レベルにおける多人種主義研究では、「シンガポール人のためのシンガポール」というネイションを優先にさせる側面と人種を強化する側面があると述べる。他方、団地生活レベルでの多人種主義として鍋倉は公共団地の観察によって考察している。鍋倉は、共用性に特化した人種を問わない日常的な相互作用に着目し、そこに人種間における暗黙の連続性や分け隔てなさ、人種という分類の希薄化か

ら共同性が萌芽すると述べる。つまり、「各人種を解体し、共通性、共用性から共同性を導く側面」がありながら、「人種を強化しその違いを強調する側面」が働くことで、人種を分断する力が生じるとする。

シンガポールにおける多人種主義とは政策レベルだけではなく、団地生活レベルにおいても成り立っている。団地住民たちは、国家によって押しつけられた住空間を受動的に受けいれているだけでなく、能動的に人種を問わない近隣関係を築き、共同性に向けて、自分たちにとって住みやすい多民族空間を作りあげている。そのような環境において住民が能動的に近隣関係を築いているという前提があるからこそ、政府は民族を解体する仕掛けが行えるとしている。多人種主義が人種を強化する側面と共同性を生み出す側面との両方があることを鍋倉は指摘し、かつそれを能動的に住民が築いていることに着目した<sup>11</sup>。

鍋倉の研究によって多民族が隣接して居住しても暴動が起きない背景は明らかになったが、では、シンガポールの人々の自己理解はどのようにして形成されているのだろうか。以下では筆者の調査によるシンガポールで生活する人々の具体的な事例から以上のことを検討していきたい。

### 3. 多民族主義によって形成されたシンガポール社会

前節でみたように、多民族主義によって民族は強化されているが、それはシンガポール人の自己理解の形成にどのような影響を与えているのだろうか。民族が強化されていることをシンガポール人はどのように受けとめているのだろうか。また、民族が強化されていると感じているのだろうか。

筆者が行なったマレー系50代の女性のAさんはインタビューで次のように語る。

シンガポールには、私たちは民族、文化、宗教をたくさん持っている((中略))一度外に出るとこれは華人のもの、これはマレー系のもの、これはインド系のものだとわかる<sup>12</sup>

Aさんはシンガポールに民族的差異が明白にあり、そしてそれが認識可能であると述べる。では、どのような空間をつくることでそれが可能となっているのだろうか。

筆者は2009年1月～2月、2010年1月～3月、2011年1月～2月にかけて、シンガポール中部にあるリトル・インディア駅近くの公共団地に住む華人系家族の家に滞在<sup>13</sup>し、団地内外の参与観察とインタビュー調査を遂行してきた。以下ではまず、団地内部の様相からシンガポールの民族的差異のあり方をみていこう。

#### (1) リトル・インディア近辺にある団地内部の様相

筆者が参与観察したのは15階からなる公共団地内の5階である。この団地は建物の構造上、2階から5階までは1周することができるが、6階から10階はコの字型に設計されており、1周することができない。また11階から15階は、エレベーターを降りて左右2戸ずつ計4戸となっている。

5階でエレベーターを降りて右に曲がる。左側には住民の洗濯物が干されており、右側には

観葉植物がつけられている。廊下を歩くと T シャツや学校の制服などとまじってイスラム教を信仰する女性が頭を覆うスカーフが干されているのが目に入ってくる。右側に進むと家人が在宅しているとドアや窓を開け門扉を閉め空気の通りを良くしている家がある。廊下には住民の家の匂い—ココナツの匂いやカレーの匂い—が漂う。匂いとともにも多様な言語が廊下に響いている。テレビの音声<sup>14</sup>や華語、マレー語、タミル語、中国語方言、シングリッシュによる家族の会話も通りすがりに耳に入る。さらに進むと、門扉を開けている家から道教の祭壇が飾られているのが垣間見える。ドアや門扉の飾りに目を向けると、朱色の布地に金糸で「福」の字を縫いこんだものが逆さに飾られている。その隣の家は縁起担ぎで玄関の床に幾何学模様を描き、玄関のドアにバナナの葉を飾っている。家の内部にガネーシャ神<sup>15</sup>が飾られているのが見える。装飾のない家の前を進む。一見すると何の装飾も確認することはできないが、よく見るとドアの上部にキリストとマリアと思われるハガキサイズの絵が飾られていることがわかる。さらに歩を進めると、門扉上部を「恭喜發財」と金糸で縫われた深紅の布地で覆われている家にたどり着く。次の家はドアと門扉を閉めているが、ガネーシャ神をドアの中央とドアの上の壁に貼り、さらにドアの左右にココナツを吊るしている。床には幾何学模様が描かれている。<sup>16</sup>

共通の住空間は規格化されているが、規格化されているからこそ、民族間の差異が顕著に浮き出ている。つまり、団地内においてそれぞれの民族特有の伝統や文化は保持されたままなのであり、Aさんが言うように、民族間の差異は常に知覚可能な状況となっているのである。このような多彩な民族間の差異の可視化は、多様な民族が共存しているということの日常的な認識を可能にしているのだと言えるだろう。

## (2) リトル・インディアの町並みの様相

団地以外においても民族間の差異は常に視覚化されている。例えばシンガポールでは、政策によって公共機関では英語、華語、マレー語、タミル語の4言語の記載が行われている。そのため、シンガポール内の全ての駅構内では多言語が使用されている。しかし、政策によらないところでも民族的多様性にあふれている。

リトル・インディアでバスを待つ。同様にバスを待つ人は華人系の少年、サリーを着たインド系の女性、スカーフを被ったマレー系の女性、インド系の男性たちである。バスに乗り後方に座る。車内には前方にパンジャビを着た女性とスカーフを被る女性が隣り合って座っている。筆者のすぐ前には頭にターバンを巻いた男性が座っているがその隣は華人系の男性である。<sup>17</sup>

バス停で待つ人、バス車内にいる人の全てが民族衣装を身にまとっているわけではない。また学生は制服を着るため、着衣から民族を判断することは難しい。イスラム教を信仰する女性の中には、スカーフを被らない人もいる。しかし、そうであっても、華人系、マレー系、インド系といった分け方は肌の色や言語などで判断することができる。英語やシングリッシュ<sup>18</sup>を話していたとしても、そのアクセントの置き方や抑揚の付け方は民族で異なるため、差異の認識は可能

なのである<sup>19</sup>。

リトル・インディアにあるラングンロードを歩く。全長1kmほどの通りにショップハウスが軒を連ねるが、そのほとんどにシャッターが下ろされている。車の通りはほとんどなく、残された看板の多くは中国語と英語で書かれている。半分ほど歩いたところにある店舗前に道教の金色の祠がある。そのすぐそばの樹木にはヒन्दウー教の紅い祭壇が取り付けられている。<sup>20</sup>

シンガポールのあらゆる場において、政策のみならず人々の能動的な行為によって常に民族間の差異を明確に認識することができる状態となっているのである。こうしてシンガポールでは、民族間の差異を明確に高度に可視化することで、多様な民族の存在を認識することが可能なのである。

### (3)インタビュー調査からみるBさんとCさんの近隣関係のあり方

このように民族間の差異を強化し、可視化した生活空間において、シンガポールの人々はそのような相互行為を行っているのだろうか。次の表は筆者がこれまで行ってきたインタビュー調査のなかから隣人関係に着目して聞き取ったものの一覧である<sup>21</sup>。どのインタビューも、前半は英語だが、互いに打ち解けてくるとシングリッシュになっている。

表1 インタビュー対象者の関係性

調査地	互いの民族的背景(父親を基準)	隣人関係歴(年)	子供の有無
シンガポール北部	華人系Bさん インド系Cさん	4年	あり(同年代)
シンガポール中部	マレー系Dさん 華人系Eさん	2年	あり(同年代)
シンガポール東部	華人系Fさん インド系Gさん	2年	Fさんはあり

みな、現在40代後半～50代前半である。BさんはかつてDさんとEさんと同じ団地に住んでいたが、息子の小学校担任の教師としての質に疑問を抱き、シンガポール北部の学校へ転校するために4年前に引っ越しをした。BさんとEさんは現在でも1、2か月に1回は家族全員で会う仲だというが、BさんとDさんの関係はBさんの引っ越しを機に疎遠になっている。

以下では、筆者がおこなったインタビュー調査から、最も隣人関係歴の長い華人系の50代女性Bさんと<sup>22</sup>、インド系の40代女性Cさん<sup>23</sup>の語りから二人の近隣関係を捉えていく<sup>24</sup>。本稿で取り上げるインタビュー・データは華人系Bさんとインド系Cさんのみである。限定的ではあるが、BさんとCさんの語りから異なる民族による隣人関係のあり方を聞き取り、そうすることで民族的差異が強調された空間で形成されるBさんとCさんの生活の一面を捉えることができるだろう。

以下の語りは、インタビュー中、華人系Bさんの息子とインド系Cさん家族の息子が廊下でサッカーをして遊んでいることをきっかけに始まる。

\* 「息子さんはよく彼(Cさん家族の長男)と一緒に遊ぶのですか?」

B: 「年齢も同じだし隣に住んでいるから仲が良いです。我が家が皆で海に行ったりスケートに行ったりするときにも誘うことが多いです。彼女の旦那は自営業しているから週末も休みがありません。息子も友達がいたほうが楽しめるから(Bの息子もいた方が良いでしょう)」

\* 「((中略))子供が多いと面倒みるのも大変ではないですか?」

B: 「小学生だとお互いあまり危険なことはしません。食事も彼ら(ヒンドゥー教徒)は牛肉を食ませんが、屋台村へ行けば問題ありません。」

子ども同士の学校が別々であるにもかかわらず、休日に家族ぐるみで付き合うほど華人系家族とインド系家族の仲が良いことがわかる。また休日でも夫が自営業のため家族で外出が難しいCさん家族だが、隣人の華人系Bさん家族により、子どもは遠方への外出が可能となっている。しかし、このような関係においてもBさんはヒンドゥー教を信仰するCさん家族のことを配慮して食事の場所を選択している。では、Bさんは以上のように語る近隣関係について、Bさんの隣人であるCさんはどのように語るのだろうか。筆者は、Cさんにも同様のインタビュー調査を試みたところ、Cさんは次のように語った。

(週末、Bさんの家族によく子どもを遊びに連れて行ってもらっているお礼に)たまに私の手料理を持って行きます。私はインド系なので豚肉や牛肉を使った料理は作りませんが、野菜のスープとかを作ると喜んでくれます。Bさんも華人系だけけど(Cさん向けにわざわざ)豚肉を使わない、エビをつかった餃子を作ってくれます。彼女の餃子はとてもおいしいです。

BさんとCさんの家族は、同い年の子どもを通じて近隣関係が深まっており、さらにBさんとCさんの家の間では、それぞれの民族における食文化の違いがあるにもかかわらず、それぞれの工夫を施した上での食事のお裾分けが行われている。Bさんは、インド系のCさんのために豚肉ではなくエビを使って餃子を作り、またCさんも、自分自身がインド系なので豚肉や牛肉を使わない野菜のスープを作ってCさんに渡している。つまり、BさんとCさんは、各々の民族が異なることに十分配慮した上で親密な近隣関係を築いていることがわかる。こうした相互行為では、決して民族間に暗黙の連続性があるというだけではなく、それぞれの民族の差異は、保持され続けているのである。

Cさんが現在の団地に住むようになったのは今から12年ほど前になるという。その前はマレー系家族、ロシア系家族、華人系の2家族とCさん家族と一緒に一つの家に住んでいたという。そこでは風呂、トイレ、台所が共有であった。共有であるがゆえに、家族間のトラブルも多かったと言う。

朝は本当に大変。トイレも洗面所も皆使うでしょ?だから競争よ(笑い)。まな板も置く場所がないから置いてあるのを使うようになって。((中略))誰だったか忘れたけど、うっかり(イスラム教を信仰する)マレー家族のまな板で豚肉を切ったことがあって、ケンカになったこ

ともあったの。このまな板はもう使えないって。

まな板を無断で使用する事が問題にはならなかったが、まな板にのせる食材によっては問題になる。ここではイスラム教を信仰するマレー系家族のまな板の上に、イスラム教がタブーとする豚肉を誤って置いて切ったことがケンカの原因となったのである。これは民族間の差異を保持しないまま行為をしたことの失敗例といえる。このようなトラブルはCさんが記憶している限りではこの件だけだったという。つまり、Cさんをはじめ、マレー系、華人系、ロシア系の家族の注意深さと不断の努力がどれほどのものか想像に難くない。このような民族的な違いを意識したうえでの近所づきあいが当たり前になっている状況について、Cさんは次のように語る。

シンガポール人は皆受け入れることが出来ます。人を蔑んだりしません。

Cさんのような一つ屋根の下で多民族と共同生活をしたことはないが、多民族と共存することについてBさんは次のように語る。

シンガポール人はオープンマインドです。私たちは全ての文化を受け入れます。皆友達です。((中略))私たちはいろいろな文化と触れ合うのに慣れています。((中略))私たちの近所は華人系が多く、働きに行くで華人系、マレー系、インド系、インドネシア系・たくさん(の民族が)います。若いときから一緒にいて育ちました。学校に行くと私たちの学校にはすべての民族がいる。だから別の人という目で見ません。あなたは華人系(右手を上から下に降ろす)あなたはインド系(左手を上から下におろす)違う。皆同じです。これがシンガポール人の特別なところですよ。

民族的差異が可視的な状況で、かつ、多民族との日常的なかかわりが不可避的な状況によって「シンガポール人」という意識が形成されているということが出来る。

以上でみてきたように、シンガポールにおいて、日常的な多民族間による相互行為は、差異の視覚化により強化し、相互行為をおこなっているということが以上のデータからいえる。とはいえ、まな板事件でわかるように、差異を認識しながら相互行為を日常的に行うことには相当の努力を要する。この不断の緊張を強いるのも多民族主義の一面なのである。しかし、そのような差異を保持したままの相互行為は、BさんとCさんにとっては、インタビューにおいて明らかになったように「シンガポール人」だからできるのだと語り、Bさんはそのような点を「特別なところ」だと表現している。民族的差異を強化し強調している社会で日常的にかかわれる相互行為によって「シンガポール人」が形成されているということが出来る。

#### 4. 結びにかえて

シンガポールは多民族主義によって民族内の多様性は抑制されつつ、民族間の多様性は強化されている。リトル・インディアにある公共団地は、クォータ制によりいずれも差異にあふれていた。また、その界隈の町並みも同様に民族的多様性が認識可能となっている。引越したとして

も、高度に可視化された民族的差異からは逃れることができない。上手く折り合いをつけて差異と共存するしか方法が残されていないのだ。そこにどれだけの労力と努力、忍耐が要されるのか想像に難くない。その暗黙のルールを簡単に破ったことが本稿冒頭で触れた「カレー事件」であろう。中国人家族がインド系シンガポール人の生活様式にたいして公共機関に異議申し立てをしたことをきっかけに起こった事件だが、興味深いのは、非インド系シンガポール人もカレーを作ると facebook で表明したことだ。食べるではなく作るといった、自らの生活空間内での積極的行為を前提とする運動に参加を表明したのである。つまり、自分の生活空間内においても民族的差異を強調したと考えることができる。

では、なぜシンガポールの人々は民族間の差異を強化し、保持しようとするのだろうか。

BさんとCさんは民族間の差異の尊重を「シンガポール人」の特別な点であり「シンガポール人」だからこそ可能なことなのだとして述べていた。BさんとCさんは、民族間の差異を強調し可視化していることこそ「シンガポール人」の特別な点として捉えているのだ。

一般に民族間の差異を強調することはネーションとしての一体感を生み出しにくいと考えられている。しかし、シンガポールでは、多民族主義という政策によって民族というカテゴリー内の差異は統制しつつ民族間の差異を強調している。このような社会において、差異とは民族を区別するための分断要因でもあるが、同時に「シンガポール人」となるための要因ともなりえることが以上の研究からわかった。つねに民族的差異にあふれている社会で生活するということが、すでに述べたように、人々の相当な労力と努力、忍耐が求められる。そのような社会で暮らしているということが、「シンガポール人」として特別な点だと捉えていることがわかった。換言すると、民族的差異を強化し強調している社会において、民族的差異を認識できる相互行為によって「シンガポール人」という意識を形成していると考えられるのだ。

- 
- 1 センサスにおいて、総人口にはシンガポール居住者 (residents of Singapore) と非居住者の合計が示されている。シンガポール居住者とは、シンガポール市民と永住権取得者を総称した人びとのことである。非居住者として外国人労働者とその家族、移民、留学生など政府が発行するビザを取得した人のことを指す。
  - 2 シンガポール統計局HPより (<http://www.singstat.gov.sg/stats/keyind.html#popnarea> 2013年4月2日閲覧)。
  - 3 Census of Population 2010 Advance Census Release, P v より。
  - 4 シンガポールのraceは、肌の色といった身体的な差異も含まれているが、宗教や文化、習慣に基づく差異も重視されている。また、例えば華人系の内部では、特に高齢者において福建や広東、潮州などの出身地の別が重視されており、それぞれの出身地によって言語も風習も異なる。この下位区分もシンガポールにおいては重要な差異である。このような背景を考慮すると人種やエスニックと訳すよりも民族と訳すことが望ましいと考えられる。
  - 5 マラヤ連合への統合を目的としていたため、自治権をイギリスから獲得し、与党PAP (People's Action Party) が政権についた直後から「マレー化政策」を進めることになった。国語をマレー語とし、非マレー人にマレー語習得をめざした様々な政策や試みが行われた。
  - 6 シンガポール統計局より<http://www.singstat.gov.sg/pubn/popn/c2010sr1/t47-57.pdf> (2011年10月20日閲覧)。
  - 7 1968年には英語校在籍生徒数の割合が全体の59.4%、華語校在籍生徒数の割合が33.3%、マレー語校在籍生徒数の割合が6.9%、タミル語校在籍生徒数の割合が0.3%だったが、1978年になると英語校

- 76.1%, 華語校22.9%, マレー語校0.9%, タミル語校0.1%となり, さらに1983年には英語校92.5%, 華語校7.4%, マレー語校とタミル語校がともに0%となった(田村 2000: 189)。
- 8 NHB設立以外の芸術政策として1995年「芸術のためのグローバル都市シンガポール (Singapore: Global City for the Arts)」計画と2000年「ルネッサンス都市レポート (Renaissance City Report)」がある。詳細は川崎 (2006)。
  - 9 シンガポールの多民族主義について論じるベンジャミン以降の研究では, クラマー (Clammer 1982), シディック (Siddique 1990) 等がある。まず, クラマーは民族を「公式モデル」と「民俗モデル」に分け「民俗モデル」においては流動性があるという点からベンジャミンとは異なる視点を見出している。また, シディックはクラマーと同じように民族における流動的側面を有するインド系家族を事例に検討している。シンガポールの多民族主義研究において, 現地調査に基づく数少ない貴重な研究となっている。
  - 10 企業の多文化主義とは「新たな市場, 安価で望ましい労働力を求めて資本が国境を超える後期資本主義の競争のなかで効率性や生産性を確保するためには, 性差や民族や宗教といった差異を取り込むことで折り合いをつけてゆかざるを得ない」(米山2003: 23) という観点から多文化主義を要請とした考え方である。キムリッカが代表するようなりべラル多文化主義との違いとしては, 「通常は可視化されることのない『少数者の文化』が主流の社会によって顕著に取り沙汰されてゆくことは, 単に, 文化的少数者の自己表現の機会が増えたことを意味するのではなく, 『民族』や文化的差異による刻印と有標性のもとの, 『文化』が商品価値を生む」(米山2003: 23) ことを挙げている。
  - 11 シンガポールは現地調査に基づく研究が遂行しにくい。というのも, 団地以外の居住地の確保が難しいシンガポールにおいて団地当局は絶対的な存在となっている。強権国家であるシンガポールでは, 団地当局の管理下におかれた団地住民は他者を警戒しなければならないため, 調査者を簡単には受け入れてくれないのである。よって, 鍋倉の研究は数少ない現地調査に基づいた大変貴重な研究と位置付けられる。
  - 12 ここで使用したインタビューはマレー系に属する50代の女性の語りである。彼女とのインタビューはこれまでに3度行なっているがここで使用したインタビュー・データは2010年2月20日に彼女の自宅で行なった。また, 本稿ではインタビューのトランスクリプトの一部を提示している。トランスクリプト内の\*はインタビューアである筆者, アルファベットは語り手, ( ) は筆者による補足説明を示す。インタビュー協力者とは筆者の知人を通じて知り合った。
  - 13 ステイ先の家族は40代の公務員をしている父親, 博物館でボランティアをしている日本人の母親(40代), ジュニア・カレッジ1年の娘, 中等学校1年の息子の4人家族である。
  - 14 シンガポールでは4つの言語別に放送局が分かれている。しかし, 放送局そのものはすべてメディア・コープ (media corp) という政府系企業の管轄下におかれているのである。
  - 15 ガネーシャ神とは像の頭に人間の身体をもつ姿をしており, あらゆる事象を司る万能の神であるとされている。
  - 16 2009年2月9日フィールド・ノーツより。調査した時間は午後2時より4時までである。
  - 17 2009年2月19日のフィールド・ノーツより。
  - 18 シンガポール人が使用する英語は大別すると二つあり, 一つは標準英語, もう一つがシングリッシュである。この二つの英語は, ダイグロシアの関係にあり, 標準英語が公式な状況で使用される英語に対し, シングリッシュはシンガポール人が非公式の状況で用いる。標準英語とは異なる文法や単語を用いるシングリッシュは初めてシンガポールを訪れた外国人に通じないため, 政府はスピーク・グッド・イングリッシュ・キャンペーン (Speak Good English Campaign) などを通じてシングリッシュの排斥を試みている。しかし, 多くのシンガポール人はシングリッシュにたいしてアイデンティティや愛着を感じている。
  - 19 現在シンガポールでは民族間結婚が進んでいる。女性憲章に基づく結婚では1987年には3.8%であったが, 2007年は13.7%, イスラム教徒法に基づく結婚では1987年は15.1%だったが2007年は29.7%と増加傾向にある (Statistics on Marriages and Divorces 2007,p.6)。このため, 外見と本人が所属する民族が一致しないことも増えてきている。

- 20 2009年2月8日のフィールド・ノーツより。
- 21 対象者はいずれも筆者の友人に紹介して頂いた。いもづる形式のため対象の家族構成や年代が似通っている。同年代の子どもがいるため相互行為がしやすくなっているという点は考慮すべきであろう。
- 22 Bさんは華人系の50代女性で政府系企業に勤務する夫、中等学校に通う娘と小学校に通う息子を持つ。Bさんは学校職員として勤務している。両親ともにシンガポール生まれ。父親は他界。母親は76歳でBさん宅の近くに居住している。父方の祖先は海峡マラッカ出身の華人系で母方祖先はリアウ諸島出身の華人系。日常使用言語としては職場では英語とマンダリン。家庭でも同様である。
- 23 Cさんはインド系の40代女性で事業を営む夫と中等学校に通う娘と小学校に通う息子を持つ。夫はインド生まれだが、Cさんはシンガポール生まれである。現在は学校職員として勤務している。父親は他界、母親は70代でシンガポール国内に居住。両親ともにインド南部の村に出生、父親がまず移民し、後に母親が結婚のためにシンガポールへ来た。日常の使用言語としては英語とタミル語、挨拶として華語、マレー語も使用している。いずれもCさんの自宅で遂行している。
- 24 Bさんへのインタビューはこれまでに2009年1月31日と2010年2月24日に行っており、いずれもBさんの自宅で実施している。Bさんの自宅玄関付近は民族的な装飾はしていないが、インタビューを遂行したリビングにあるソファとダイニングセットは木製のハスの花と鳥が彫られたものである。Cさんへのインタビューは2009年2月18日、2010年2月10日、2011年2月8日に聞き取っており、いずれもCさんの自宅で行っている。Cさんの自宅玄関にはチョークで描かれた幾何学模様はあるが、バナナの葉やココナツ、ガネーシャ神は飾っていない。しかし、リビングにはガネーシャ神のポスター、ガネーシャ神やその他のヒンドゥー教の神々が描かれたポスター、そしてヒンドゥー歴による日めくりカレンダーが飾られており、それぞれのガネーシャ神には花でできたネックレスをつけている。両者のインタビューは、それぞれの職場の人間関係、団地内の人々との交流、親戚づきあいなど多岐に及んでいる。本稿では紙幅の都合もあり、多民族が相互行為する困難さも検討しなかったため、宗教的タブーが多い食に関わる語りに特に着目した。

## 【文献】

- Benjamin, Geoffery, 1997, 'The Cultural Logic of Singapore's "Multiracialism"' in Ong Jin Hui · Tong Chee Kiong · Tan Ern Ser (eds), *Understanding Singapore Society*, Times Academic Press, pp.67-85
- Chua, Beng Huat, 1995 "Culture Mutiracialism and National Identity in Singapore" *National University of Singapore Working Paper No.125* Singapore Department of Sociology, NUS
- , 2009 "Being Chinese under official multiculturalism in Singapore". *Asian Ethnicity vol.10 No.3*, pp.239-250
- Clammer, John, 1982, "The Institutionalization of Ethnicity: The Culture of ethnicity in Singapore", *Ethnicity and Racial Studies* vol5 issue2, pp.127-139
- Department of Statistics, 2011 *Census of Population 2010 Advance Census Release*
- , 2008 *Statistics on Marriages and Divorces 2007*
- 川崎賢一, 2006, 『トランスフォーメティブ・カルチャー』 勁草書房
- 小井戸彰宏, 2005, 「エスニシティ」 宮島喬編『現代社会学 改訂版』 有斐閣
- 鍋倉聰, 2011, 『シンガポール「多人種主義」の社会学 団地社会のエスニシティ』 世界思想社
- 奥村みさ, 2009, 『文化資本としてのエスニシティ シンガポールにおける文化的アイデンティティの模索』 国際書院
- Siddique, Sharon, 1990, "The Phenomenology of Ethnicity: A Singapore Case-Study" in Ong Jin Hui · Tong Chee Kiong · Tan Ern Ser (eds), 1997, *Understanding Singapore Society*, Times Academic Press, pp.107-124
- Statistics on Marriages and Divorces 2007
- 田村慶子, 2000, 『シンガポールの国家建設-ナショナリズム, エスニシティ, ジェンダー』 明石書店
- 米山リサ, 2003, 『暴力・戦争・リドレス』 岩波書店